

今回は、普遍論争と言われる難問を紹介しました。すなわち、言葉（概念）というものは複数の物を表すことができるが、それは何なのかというものです。例えば、「イヌ」という概念は、どこにも存在せず、実際に存在するのは「ハチ公」や「ラッシー」なのですが、では「イヌ」という概念は何なのか、という問題です。

これに答えるには、物がいったいどんなふうになり立っているのか、ということと、人が物を知るといっことはいったい何を知ることなのか、という二つの問題を解決しなくてはなりません。つまり、一筋縄ではいかない難問だということです。

まず、物の成り立ちというところから始めましょう。ここで、哲学というものは「全体を見ていく」ということを思い出してください。物の成り立ちを見るというのは、その分子構造を見るような仕方ではないのです。この「全体を見る」という仕方が、きっと最初は引っかかるかと思えます。

ご存じのように、ギリシアでは「現実はたえず変化しとる（パンタ・レイ）」という人（ヘラクレイトス）と、「いや変化なんてのは表面的なもので、本当の存在は不変であり、唯一であり、永遠だす」という人（パルメニデス）の対立があった。実際、世界が変化していることは感覚で見ると明らかですが、他方もしすべてが絶えず変化しているなら人は何も知ることができないはず（知るといっことは「～である」と言い切ることですが、変化している物についてはそういう断定はできない）。

端折って言いますが、アリストテレスは変化には二種類あることに気づきました。一つは、そのもの自体は変わらない変化。例えば、木の葉が緑から黄色に変わっても、葉であることは変わらない。もう一つは、そのもの自体が別の物になる変化。たとえば、葉が焼けて灰になるような変化です。灰はもはや葉ではない。

一番目の変化、つまり葉の色の变化から始めましょう。この例では、変わるのは色です。同じように、葉の大きさや重さや場所も、たとえある程度変化しても、葉自体は葉であり続ける。アリストテレスはこのような変化において変わる部分を accidents と呼び、変わらないものを substance と呼んで区別することにしました。Substance とは “sub” と “stance” の二語からなる言葉ですが、“sub” は「～の下に」という意味で、“stance” は「立つ」という意味です。すなわち、色や形などの「下にあって」、それらを下から支えているものという意味で、日本語では「実体」と訳しています。

Accidents とはラテン語で「生じる」という意味の “accidere” から来ていますが、日本語では「付帯性」とか「偶有性」とか訳されます。それは、実体の上に「生じる」からです。（ちなみに、accident の普通の訳は「事故」ですが、これも「起こったこと」という意味です）

この実体と偶有性の問題を別の面から見ましょう。いつか「哲学は存在するものすべてを対象にする」と言いました。しかし、世界には実に多様なものが存在し、またその存在の仕方もいっぱいあります。たとえば、リンゴが一つあるとします。私たちはそれを見て、「リンゴがある」というだけでなく、「このリンゴは赤い」、「丸い」、「150グラムだ」、「青森県産だ」とかいろいろと言うでしょう。これらの文は、「このリンゴは赤くある」、「丸くある」、「青森県産である」というふうに言い換えることができます。つまり、一つのものにはいろいろな「あり方」があるということです。（こんな風に言うと、もう頭がこんがらがってくるかも知れませんが、少しご辛抱を）。こういうことは、普通誰も気にせずに平気で話しをしていますが、それを「これは不思議だ」と気がついた人がいた。それがアリストテレスです。



その説明を簡単に言うと（簡単に言っても難しいが）、大体次のようになる。目の前にリンゴがあるとす。そして、このリンゴを見て「AはBである」（英語で言うと“A is B.”）という最も基本的な文を作ってみてください。きっと「これはリンゴだ」、「これは赤い」などなど上に言ったようにいろんな文を作ることができるでしょう。このBに当たる部分（それを述部という）には、いったいどんな種類のものが入るのかを考えてみよう。そうすると、それは「リンゴ（実体）」、「赤い（性質）」、「大きい（分量）」などに分けられる。アリストテレスはこれらの述部の種類を「カテゴリー（日本語では範疇という難しい言葉）」と呼び、それを上に言った4つだけでなく、場所、時、関係などを加えて10あると言いました。後でカント（1724～1804）はカテゴリーを12としましたが、その数は大切ではありません。大切なことは、このカテゴリーはもののあり方の種類であると同時に、述語の種類でもあるということ、そして大きく二つに分けられることです。すなわち、「実体」とそれ以外（偶有性）です。

リンゴには一定の色（赤）、形（丸）、重さなどがある。けれど、一番大切なのは「リンゴであること」でしょう。だから、リンゴを指さして「これは何ですか」と聞かれたら、「赤です」とか「丸です」とか答えずに、「リンゴです」と答える。つまり、「リンゴ」はそれ自体で存在するが、色や形や重さはそれだけで存在することはできない。「赤色」だけがどこかに存在することはなく、何か物があって、その物が赤い。「丸」がどこかにあるわけではなく、何か丸い物がある。つまり、赤や丸ということはリンゴがあって初めて存在できるもので、いわば「リンゴの上に乗っかっているもの」です。

「哲学が存在を扱う学問」ならば、まさに実体こそ哲学が扱うものです。こういう立場をとるのが、アリストテレスに代表されるギリシア哲学とそれを継いだ中世西欧のスコラ哲学です。ところがオッカムという人（1289?～1349）は、この考え方に反対します。この新しい見方は近代の哲学者に引き継がれました。その底にあるのは「そもそも実体って、あるのか」という疑問です。この疑問の裏には、重大問題がたくさん潜んでいるのです。彼らは、「人間が知ることができるのは、色や形や肌触りなど、五感で感知できるものだけで、実体ちゅうもんは五感では感知できへんやんか」と言って、「『イヌ』という言葉は、単なる空気の振動にすぎへん」と断言します（唯名論という）。近代になると、五感に訴えてくるものを現象と呼び、人間は現象のみを知ることができるが、「もの自体」は知ることができないと断言しました。ざっくりばらんに言うと「ものの表面のことはわかるけど、中身はわかるはずがねえ」てなことですね。

五感が現象しか感知できないことは確かです。しかし、では人間はものの実体を知り得ないのか。もしそうならば、私たちはものに名前をつけることができなくなります。犬を見ても、「あれは口がとがり、耳がぴんと立っていて、ワンワンと吠えるものだ」としか言えなくなるでしょう。本当は「口」、「とがる」、「耳」、「ぴんと立つ」、「吠える」ということも言えない。なんせ、それらのものも五感では把握できないだから。しかし、現実にはそういうもの（口がとがり、耳がぴんと立っていて、ワンワンと吠えるもの）を見ると、「犬だ」と断定します。すなわち、人は実体を何の疑問もなしに示すのです。



ここまで言うと、鋭い人は「ははん、先日問題にしとった概念とは、物の実体のことやな」と独り言を言うでしょう。でもことはそう簡単ではありません。もう少しこの問題を続けたいと思います。

William of Ockham. イギリスのオックスフォードの教授、フランシスコ会の修道士。